連載：原点

初任者として

市原高等学校　中込 優

私が高校の教員を志したきっかけは，大学４年生の時に母校で行なった教育実習である。それまでは，教員になりたいという思いを持ちつつも，自分が教員として仕事をしていく自信がなく，現実から目をそむけていた。しかしながら，教育実習で素晴らしい指導教官と出会い，充実した毎日を送るなかで，高校の教員を目指そうという意思が強くなった。更に，日々の勉強や部活動などに一生懸命向き合っている生徒たちと関わることがなによりも楽しく感じられ，学校現場であれば自分の学んできたことを最大限生かせるのではないかと思えた。このことが，教員を目指す決め手となった。

市原高校に着任してから今日までは，まさに怒涛のような毎日であった。教育実習や２年の講師経験で培ったことが，ほとんど通用しない学校現場もあるということを知ることができた。教科指導では，数学に苦手意識を持っている生徒がクラスの９割以上を占め，分数の足し算・引き算や掛け算九九の計算を正確にできない生徒も目立つ。高校数学をわかりやすく丁寧に教えることはもちろんであるが，それ以前にどうしたら数学の問題に向き合ってくれるかを日々模索している。クラスの中に数名でも数学に興味を持ち，少しでも好きになってくれる生徒が増えるよう，今後とも教材研究に力を尽くしていきたい。また，市原高校には，黙って椅子に座っていることが困難な生徒や，１度寝てしまったらなかなか起きない生徒，通常学級で合理的配慮を要する生徒などが多く在籍し，その対応は一人一人異なる。そのような中で，学校全体で特に力を入れて取り組んでいることが生活指導である。服装・頭髪を正すことに力を入れ，茶髪・スカート丈・ピアス・化粧の４点を重点的に指導している。それに加えて，当たり前のことが当たり前にできるように，挨拶の指導や遅刻指導，敬語やマナーに対する指導等も徹底的に行い，凡事徹底を目指している。指導の中で感じることは，１対１ではなかなか生徒は変わっていかないということである。複数の教員が気になった生徒に声をかけ，継続して根気強く指導を行うことで，生徒は徐々に変わっていくということをこの４か月の間で少しではあるが実感した。教員同士で協力し合い，同じ方を向いて仕事をしていくことがどれだけ大切なことか，学校がいかに組織として動いているかを，日々痛感している。

市原高校に限らず，学校現場は様々な問題を抱えているということを，教諭の立場になってより強く感じている。今は周りの教員の方々の動きをよく見て，微力ながらも力になれるように努力していく所存である。幸い市原高校には，大変指導熱心で，教科指導においても生活指導においても私のことを気にかけ，アドバイスをくださる先生が多い。市原高校で多くのことを学び，吸収し，教員として日々成長していけるよう努めたい。

初任校に勤務することができるのは最大５年。私はこの１年で，与えられた仕事に責任を持って取り組み，さらに来年度のことを見据えて行動していくつもりである。この市原高校で私にできることは何かを考え，自分の強みを見つけ，１日でも早く学校の力となり，生徒のために活躍できるよう，精進していきたいと思う。